

[潤生園ニュースレター]

vol.11

2026

# うるる

特集

## 一人ひとりに向き合うこと

潤生園の「定期巡回・随時対応型訪問介護看護」と「自立支援介護」における取り組みを取材しました。

対談

### 「ひらかれた器」としての空間

金野千恵（建築家・teco代表）× 時田佳代子（潤生園理事長）



はじめに

人は誰でも、他者の力を借りずに自立していききたいと思っています。そのことを私たちは、介護を通して知ることができます。そこから人間という存在について考え、いのちの尊厳にきづかせて頂けるのです。

(時田純「生老病死と介護を語る」より)

介護は「できなくなったことのお世話をする仕事」と捉えられがちです。

でも、私たちがいちばん大切にしているのは、その方の望みに寄り添い、実現を支えること。

地域で生きる安心感を抛り所に、明日を楽しみに過ごしていただけるよう並走する、潤生園の現在と未来像を特集いたします。

介護という営みの可能性を、一緒に展望いただければ幸いです。

うるる編集部



「おお、大将。待ってたよ」

午後2時、潤生園の事務所から出発したヘルパーの露木希生さんが、ご自宅の寝室の扉を開けると、Hさんがベッドから満面の笑みを向けた。「お変わりないですか」と問いかけると「昨日も会ったからなあ。でも今日も会えてうれしいよ」と笑い合い、ケアの間も丁々発止の明るい話し声が響き続ける。

「どんな調子のときも、どんな話題でも、ありきたりの受け答えじゃなくきちんと対話してください。だから、おしゃべりしているうちに元気になってくるんですよ」。

入退院を繰り返すHさんが前向きでいられるのはヘルパーさんたちのおかげ、と廊下で奥様がつぶやいた。Hさんは露木さんのことを「大将」と呼んで、格別に頼りにしている。

Hさんが利用しているのは「定期巡回・随時対応型訪問介護看護Ⅱ」。50名ほどのご利用者を20人ほどのヘルパーが交代で対応している<sup>※1</sup>。定期訪問のほか、必要があれば専用端末でいつでも連絡が取れ、24時間365日誰かが駆けつける、地域限定のサービスだ。

潤生園と一人 露木希生さん（潤生園ホームヘルプサービス係長）

一人ひとりに向き合うこと





ほとんどのご利用者宅に、毎日複数のスタッフが3〜5回訪問(ラウンド)する。「毎日『アセスメント』をしているようなもの」という露木さんの説明通り、ケアの内容や回数は、お一人おひとりのお困りごとによって違い、状況によって頻繁に変化する。起床時の着替えのお手伝い、排泄、服薬、食事、水分補給介助などの日々のケア、熱中症のリスクが高い夏場は、水分と室温の注意喚起に回り、転倒したり、体調を崩されたときは、数時間おきにも立ち寄りで見守る。ご利用者の状況はスマートフォン搭載のシステムを使ってスタッフ間で情報共有し、必要ならば看護に連携する。この柔軟で臨機応変な対応が定額料金で叶うところが最大の特徴だ。事務所には夜勤のスタッフも常駐し、遠方に住む家族にとって、これほど安心できるサービスはないだろう。

それでも、ご利用者本人が自宅への訪問を望まない場合もある。自身の状況がわからない方の場合、知らない人が家に何をしに来たんだと不安になられるのも無理はない。「訪問初期はいつも緊張します」。その方が納得できる説明は何か、どんな調子でお声をかけたら受け入れていただけるか。スタッフ同士でも相談しながら、トライアンドエラーを繰り返していく。「何度か訪問して、顔馴染みになっていくと、ふっとお互いの緊張が緩んで少しお話をしてくださるようになったり。でも少しずつ、です」。



ケアでいちばん大切にしていることは、と伺うと、「ご利用者それぞれごとに違う、心地よい距離感」と露木さんは即答した。冗談を楽しむ方も、一線引いて丁寧に接してほしい方もいらっしゃる。「私たちみんなが、いつかは思い通りに動けない体になる。そのときどうしてほ

しいかを、ご利用者は教えてくださっていると思うんですよ」。

## 「介護ってなんて楽しい仕事なんだ」

露木さんは、新卒の入社時に訪問介護を希望して配属され、今年で10年目。同じ職場に先輩がいる施設勤務から経験を積む人が多いなか、最初から訪問の仕事に就くのはなかなか珍しいケースだ。きっかけは、介護福祉士の資格を取るときに経験した潤生園での在宅介護実習。そこで出会ったのは、先輩たちの明るく楽しげな仕事ぶりと、ご利用者の笑顔だった。「ヘルパーの訪問を心待ちにしているご利用者とのやりとりに、衝撃を受けたんです。介護ってなんて楽しい、素晴らしい仕事なんだ、と」。

短時間であっても、その時間は目の前のご利用者のために力を尽くせる。いま、訴えたいことを聞き、いま、応じることができる。その信頼感はお互いになにもものにも代え難い喜びだ。最初に感じた気持ちは、いまも変わらず、露木さんの原動力になっている。

一人ひとりに向き合うケアを。露木さんがその思いを強くした経験がある。潤生園の初代会長・時田純氏の終末期ケアに、ラウンドスタッフとして関わったのだ。「倦怠感が強いなかでは、水分補給も

お手洗いや無理強いせずにベースに合わせる。それができるのが定期巡回だよ、ということ、会長自ら見せてくださったようでした」。

その経験はいま、ご利用者への思いにつながっている。

## 笑顔で現場に立つための取り組み

在宅ケアの一つの理想系とも思える定期巡回。課題は、担い手の数だ。現在は比較的年齢層の高いベテ



# 潤生園の定期巡回サービスを支える

ホームヘルパーの方々に  
日誌を書いていただきました！

2026年1月1日 - 1月18日



1月1日(木)

特養から移動して8ヶ月。最初の頃は「施設はご利用者を面で支えるが、訪問は点でしか支えられない」というもどかしさを感じていた。だが上司から「訪問外の時間も生活の質が上がるようなケアを心がけている」という言葉をいただき、在宅のご利用者も面で支えることができる、と考えを切り替えることができた。今は特養で培った身体介護の技術を活かし、生活の質を高める訪問介護を心がけている。今年も上司の言葉を念頭におき、がんばりたい。「府川」

1月3日(土)

ヘルパーは基本、直行直帰。訪問に先立ってお一人おひとりの記録を社用携帯で読み込む必要がある。膨大な記録を読み込むのは容易ではないが、身体の状態は常に流動的で、ケア内容も細かく変化する。職員同士が会う機会が少ない私たちにとっては記録こそが全て。ケア後の記録までが「訪問介護」であり、遠く離れたご家族にとっては様子を知る唯一の術でもある。正確な記録こそが、確かなケアにつながる。「府川」

1月6日(火)

私がA様宅へ訪問に伺うのは週1、2回。いつも笑顔を見せてくださるが、今日は暗い表情。「お通じが出てしまっていて、悪いね」と仰る。お通じを「申し訳ない」と捉えるご利用者が多い。でもお通じは生きようとする身体からのサイン。今日も元気

らしいことが多いんですよ。

潤生園では組織をあげて、日々の研修や1on1<sup>※2</sup>などの相談体制を整え、安心して働けるバックヤードづくりに取り組んでいる。露木さん自身も、2年前に介護教諭の資格を取得した。技術的にも自信を持ち、笑顔で現場に立つための環境づくりがケアの質を高める。それはもちろん訪問介護に限ったことではない。ヘルパー自身が元気で、安心して働けなければ、ご利用者を元気にすることはできない。

「だから私が率先して元気を配って歩きたい。介護って楽しい仕事なんだよ、と伝え続けていきたいです」。

※1——夜間の時間帯のみに対応したサービス「定期巡回・随時対応型訪問介護看護Ⅲ」のご利用者も含む

※2——同組織、または異組織の部下と上司が定期的に1対1で行う対話の場。単なる業務報告ではなく、成長支援やキャリア、メンタルケア、信頼関係構築を目的とした「双方向のコミュニケーション」が特徴。



24時間体制でご自宅につながる訪問看護ステーション



露木希生 (つゆき・きお)

介護福祉士・社会福祉士

4年制大学の社会福祉学科卒業後、2016年潤生園に入社。入社以来、訪問介護の仕事に従事続けて10年目。



ご自宅に設置する装置がヘルパーとご利用者をつなぐ。常に身につけられるペンダントタイプの発信機もある。

でよかった、と会話の中でゆっくりお伝えする。A様の表情も少しずつ明るくなり、昨日は息子様とお寿司を召し上がったことを話された。食べること、排泄することのサイクルが前向きなこととしてあり続けてほしい。「五味」

1月7日(水)

定期巡回の開始当初は服薬確認が主だったT様だが、進行性の疾患によりケアの内容が増えてきた。長年、奥様の食事をつくってこられたT様。トーストの焼き方、味噌汁の具材、濃いめのコーヒーなど食事へのこだわりが強い。そのこだわりこそT様が歩んできた「生活歴」そのものだ。ケア時間いっぱいまで、その声に耳を傾ける。転倒のコールが増えた今、訪問と訪問の間も安全に過ごせるよう、準備や声かけにも心を込める。変化する病状やADL(日常生活動作)に寄り添って形を変え続けながら、T様の在宅生活を支える訪問を続けていく。「五味」

1月13日(火)

H様、ベッド上で遠くを見つめ「動けなくて何もできない。いやになる」とこぼされた。自ら体操に取り組まれていますね、と伝えても、表情は暗いまだだった。排泄介助の後、背中をさすると「気持ちがいい。ありがとう」と笑顔がみられた。背中をさすことは除圧や血行促進だけではなく、不安やストレスを和らげる。ただ、ご利用



者の心の状態によってはこちらの思いが正反対に伝わることもある。丁寧に表情を見ながら関わっていくことが大切。「中井」

1月18日(日)

午前3時、S様から転落の緊急コール。訪問すると車椅子の下に長座位でおられた。ボディチェック後、室内に設置されている手すりにつかまっていたら、後ろから抱えて移乗する。S様は「こんな時間にありがとうね」と仰った。夜間の緊急時も柔軟に対応できるこのサービスで、S様がご自宅での毎日を安心して過ごして頂けていれ

府川治美

西部エリア  
ホームヘルプサービス  
勤続年数：4年

五味希志子

ホームヘルプサービス  
勤続年数：4年

中井里奈

ホームヘルプサービス  
勤続年数：1年9ヶ月

記入者

# ご利用者の夢叶えます プロジェクト

潤生園では2024年より、自立支援介護の理解と実践を深めるため、専門家の齊藤貴也氏（プロフィール参照）を迎えた事例研究会を月に一度開催しています。各事業所のリーダーが集まり、ご利用者の状態改善に向けた取り組みを発表し合うこの場合は、単なる報告会ではありません。ご利用者の願いに耳を傾け、何ができるのかをみんなで問い考える。そんな現場の対話を紹介します。

開催日：2025年11月  
開催場所：潤生園れんげの里研修室  
参加者：齊藤貴也先生  
潤生園各事業所リーダー 15名



潤生園「れんげの里」の会議室での事例研究会の様子

事例1 Sさま 男性 92歳

叶えたい夢 「野球観戦をしたい」

**特養リーダー Mさん**  
水分摂取量は平均一日二〇〇〜三〇〇ml。食事はほぼ毎食全量召し上がっています。歩行については、二ヶ月前の転倒後、立ち上がりや歩行時のぐらつきがあるので、片手か両手引きで介助したり、車椅子も使用しています。改善を目指し、**二週間前から毎食後に足踏み体操を二〇回取り入れたところ、歩行が安定してきた様子**です。手を差し伸べると安心してくださるのですが、自立を考えたなら歩行器や杖のほうがいいのでしょうか。

**齊藤先生**  
まずは手引きもよいと思いますよ。歩行能力の回復には自分から前に行く体感が必要です。その点、歩行器のほうがその感覚を掴みやすいです。腰が引けると余計歩きづらくなり転倒リスクが高まるので、歩行器の高さを少し下げ気味にすると前重心のよい姿勢になりますよ。

**特養リーダー Mさん**  
活動量の低下に伴い**自然排便が減少**したため、夕食後の整腸剤・下剤の服用を併用。今月に入って排便が安定してきました。

**齊藤先生**  
**活動量と排便の連動**を分析できていますね。腸には多くの血管が通っていますから、**歩くことで腸管の血流が促され**、それが刺激となってぜん動運動が起こり便が流れる。歩行が回復傾向にあるので、腸の動きも期待できますね。

**特養リーダー Mさん**  
まずは外に出てキャッチボールを目標に進めます。

事例2 Hさま 男性 90歳

叶えたい夢 「大好きな真鶴の海を見に行きたい」

**グループホームリーダー Tさん**  
テーブルを手で叩く行為が課題になっていた方で、観察したところ食事どきが多いことに気づきました。「ほかの方が食べているのに、私だけ食べられない」というご本人からの話をスタッフで共有し、順番に配膳されることを記憶なさっておられないのではと考え、**早めの配膳、遅めの下膳を心がけたところ**、行動が現れる回数が減少したように思えます。

**齊藤先生**  
行為の観察から、改善結果が出せた、いいですね。

**グループホームリーダー Uさん**  
水分量の目標一五〇mlを達成という記録があり、すばらしいと思いました。回数ではなく、一回の量をどうやって増やしたんですか？

**グループホームリーダー Tさん**  
何か食べるものはないの？と日中よく聞かれました。食感があるほうがH様にとってよいのでは？と考え、飲み物でなくゼリーで提供したところ召し上がっていただけでした。実は最近転んで骨折し、退院なさったばかりです。改めて海へ行く目標に向けて取り組みます。

事例3 Wさま 女性 90歳

認知機能の低下により、目標設定は難しい状況

**特養リーダー Sさん**  
現在、座った姿勢で右への傾きがあります。歩行器の使用を促しても応じていただけなときもあり、歩行はできる時に少しずつという状況です。先ほど齊藤先生に現場で介助方法をご指導いただきました。

**齊藤先生**  
一緒にがんばっていらっしやいますね。一人介助の際は後ろに入って支えると転倒が防げ、スピードコントロールも介助者が行えます。ご本人が安心できるリズムをつくっていきけるといいですね。

**特養リーダー Sさん**  
ご家族からのご意向も頂いたので、股関節の可動域の改善、筋力アップに向けたリハビリ追加を検討してまいります。

**齊藤先生**  
水分摂取量の記録を見ると、一週間平均では目標の量に達成しています。また、**歩行練習に少しずつでも取り組んでいることが、夜間の安眠時間の延長にもつながってきた**、という結果が記録からは読み取れますね。

**特養リーダー Sさん**  
熟睡はできておられないようです。日中の活動量を増やして、より快適な睡眠をとっていただけるようにしたいと思います。

事例4 Dさま 男性 95歳

叶えたい夢 「ラーメンを食べに行きたい」

**グループホームリーダー Kさん**  
体調を崩されてからベッド上の生活になり、痩せてしまわれたのですが、朝昼七割、夕食五割から段階的に増やし、三ヶ月間で三食十割に戻されています。先月からは体重が1kg増加し、「美味しいご飯をたくさん食べられてうれしい」という言葉をいただきました。最近はお話しをされたり、**活気も増えた様子**があります。

**齊藤先生**  
うれしい言葉ですね！量も食形態も向上すれば、エネルギー摂取も増えます。体がしっかりしてくれば、足の運びもよくなりそうです。

**グループホームリーダー Kさん**  
先月末より歩行練習も行っています。ご家族、ご本人のご要望はトイレに一人でいくこと。リハビリスタッフからのアドバイスで、まずは廊下の往復。次に食堂から自室までの行き来を目標に取り組んでいます。

**グループホームリーダー Yさん**  
先ほど映像で拝見しました。視線も足の送りもしっかりしていて、歩行が難しい状況からの改善、すごいですね。

**グループホームリーダー Kさん**  
何年かぶりに歩いているので、まずここまで歩けるようになったことを一緒に喜ぶたいです。

※誤嚥のリスクを減らしつつ食事の満足度を高められるよう食材の刻みの大きさや食感を変える食介護の手法。

# 自立支援における「4つの基本ケア」

潤生園では身体機能・認知機能改善のために「4つの基本ケア」を重視し、自立支援介護の土台としています。前ページの事例研究からもうかがえる通り、**それぞれのケアは相互に密接に関連**しており、運動して自立状況を改善していくことが実証されています。

## 1 水分補給

高齢者の健康維持には水分補給が非常に重要です。高齢者が一日に必要な水分摂取量一五〇〇mlを念頭に、お一人おひとりの状況に合わせてサポートします。十分な水分補給は脳の血流を促し、意識と意欲の維持には不可欠。もちろん代謝(排泄)も促します。

## 2 食事(栄養)

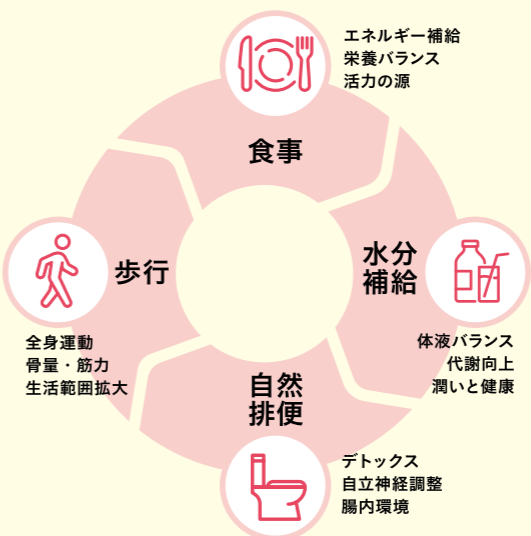
「口からおいしく食べる」ことは生きる喜び。バランスの取れた栄養摂取は体力と気力を支え、身体機能の維持・向上、筋力の低下を予防します。

## 3 自然排便(排泄)

口から摂取された食べ物が便として排泄されるまでの時間は約24〜48時間。できる限り薬に頼らない自然なリズムをつくるには、水分摂取や適度な運動も深く関与します。また自力でトイレに行き排泄できることは、尊厳を守ることもつながります。

## 4 歩行 (車椅子からの離脱と自立歩行の促進)

日常生活動作(ADL)のレベルに直結する歩行能力は「自立」の根幹を支えます。歩くことで全身の筋力や体力が増し、トイレや入浴といった「自分でできること」の範囲も広がります。運動後の様子を確認しながら段階的にレベルアップし、毎日の運動習慣を身につけられるようサポートしていきます。



「お世話するケア」からできる限りその方らしく、自立して生活できることを支援するケアへ。「自立支援介護」は、2016年度「自立支援・重症化防止」を軸に行われた介護報酬改定の重要な柱の一つとして位置づけられています。

## 介護の未来を一緒につくる

潤生園さんで自立支援介護を実践するためのお手伝いを始めて2年。介護理論(知識)と、現場でのケア力(技術)の両輪を重視しながら、自立支援の専門職(ケアエキスパート)と自立支援の教育職(ケアマイスター)の育成支援を行っています。

ポジティブな職員さんが非常に多く、ご利用者さんが元気になることを一緒に喜んでいることがすばらしい。介護者にご利用者さんの安定した関係性づくりは、ご利用者、特に認知症の方々に対して、非常に重要なのです。

現在取り組んでいる行政と連携したモデル事業や自立支援介護学会での研究活動の成果を現場にフィードバックし、介護の未来を一緒につくっていければと思っています。

### 齊藤貴也(さいとう たかや)

株式会社日本経営 介護福祉コンサルティング部推進役、社会福祉法人正吉福祉会 理事、自立支援介護学会認定講師。特養の介護職を30年勤め、2006年頃より自立支援ケアの取り組みを開始。「おむつゼロ」や「特養からの在宅復帰」に取り組み。「人間の尊厳と自己実現」を理念に掲げ、自立支援ケアの普及に励む。



台東区浅草橋、tecoの事務所が入るビルの1階「SQUARE」にて

潤生園からケアを考える

建築家・teco代表 **金野千恵** × 潤生園理事長 **時田佳代子**

# ひらかれた器 としての空間

世界中の屋根付き屋外空間「ロτζジア」をリサーチし続けている建築家・金野千恵さん。まちにひらかれた建築は、人やコミュニティをどう変えていくのでしょうか。ケアと建築の関わりについて、ともに語り考えます。

## 事務所を街にひらく

**時田** 今日、初めて浅草橋にある金野さんの設計事務所に来たのですが、1階は道路に面した部分がガラス張りですが外から中の様子が見えるんですね。街にひらかれていて、とても素敵です。

**金野** ありがとうございます。浅草橋は問屋街で、通りから職人さんの働く姿が目に入るお店が多く残っています。ああ、

日本にもまだこういう風景が残っているんだ、自分たちの事務所もこういう場所に持たいたいなと思って引越してきました。

ただ、建築事務所って外からは何をしているのかイメージが湧きにくく、存在感が感じづらいことも多いので、改築時、1階はフルオープンにできる仕組みに変えました。夜にはスタッフが食事を作る調理場もあって、そこも含めて外部の方にレンタルできる設えとしています。事務所のメンバーだけで仕事をするよりも、その場所の、地域の一員として関わっていたほうが楽しいことが起こるだろうと思っています。

**時田** 新しく施設が生まれるということは、地域の生活全体に関わってくる。その建物が生まれたら、どんな新しい景色が広がるんだろう、そうした想像力をもつことはとても大切ですね。

**金野** 私たちは設計者として「地域にひらく」とか、「自然を感じる空間を身近に」といった提案をよくするのですが、言葉だけではなかなか伝わりきらない部分があります。そんなとき、実際に



2階「GARDEN」。サッシごと完全に取っ払って窓がなく、雨も風も吹き込んでくる。建物の中にある公園のような空間

ここで生きる人の生き方を変えていくところもありますよね。

## ハードがひとの心に及ぼす影響

**金野** いちばん最初に私がロτζジアを設計した住宅は、実家(向陽ロτζジアハウス)なんです。うちの家族は、活発といえる私とは対照的に、比較的、物静かな人たちのので、もし道に面してロτζジアをつくってしまうと、気後れして外に出づらくなるだろうと思います、庭側につくりました。庭には南からの光もたっぷり入り、冬場でも洗濯物を干すための場所になります。室内からそこに

母が出て姿が見えるようになると、地域のひとたちも庭のほうから「金野さん、いる?」と気軽に声をかけてくれるような関係性が生まれました。

驚いたのは、母の変化です。この家に引越す前は自分の体調のことばかり気にしていたのに、引越してからは「庭のあの木は大丈夫かしら」「今日は鳥が来ないけどどうしたのかしら」と、関心の対象が自分から外側へと向くようになったんです。

個別のひとや家族のあり方に合わせた居場所をつくりながら、少しだけ外の世界へ踏み出してみる。自分のテリトリーを守りつつも、ジャンプしすぎない絶妙な塩梅で暮らしが拡張されていく。その僅かな調整

この1階や2階の「GARDEN」をお見せしたりするようにしています。貸しスペースとしての運営も含め、自分たち自身が実践をして、空間の豊かさや維持の難しさを体感することが重要だと思っています。

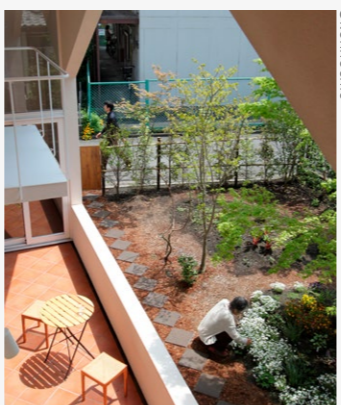
**時田** 外部の方は、このスペースをどんなふうに使われるんですか。

**金野** 建築や写真の展覧会、ワークショップ、イベント、カフェなどいろいろです。以前、近所のお米マイスターであるお米屋さんのお米セミナーとお米の炊き比べ、その米に合う近所の佃煮とお酒を楽しむ会が開かれたこともありました。

1階の窓をフルオープンしているとそれが合図となり、「今日はなにやってるの」って、地域の方が入ってきてくださるんです。

**時田** いいですねえ。福祉も医療も介護も、誰にとっても必要なものはあるのに、閉じているんですね。いざ「ひらこう」としても、プライバシーを尊重しないといけない要素も強くて難しい。けれど、金野さんが手がけられた福祉施設(地域ケアよしかわ)「春日台センター」は、地域にひらかれ、受け入れられている。本当に見事です。

## ロτζジアというケアの空間



向陽ロτζジアハウス

で、暮らしの質は一変するのだと気づかされました。

**時田** 日本の昔の暮らし、昔といってもほんの少し前のことですが、家というのは家族だけのものではなかったですね。今は、あまりにも閉じすぎているように思います。

それが地域の繋がりを希薄にさせ、家庭を孤立させていく。今の社会ではそれが「やむを得ないこと」として片付けられてしまっています。

**金野** おっしゃる通りですね。近代以降、特に住宅産業が「面積」や「LDKの数」を売りにし、内部の個室を増やすことを優先してきた結果、外側との関わりはどんどん切り捨てられてしまいました。そうした住宅が反復してつくられることで、街の景色も一気に変わってしまった。住宅産業が合理化を突き進めたこの50年ほどで、失われたものはあまりに大きいと感じます。

**時田** 今年(インタビュー当時)、金野さんが長年続けてこられたロτζジア(屋根付きの半屋外空間)のリサーチをまとめた本(『ロτζジア 世界の半屋外空間 暇も集いも愉しむ場』学芸出版社、2025)を上梓されましたね。その地域の文化や気候の中で人間らしく暮らしていくヒントが、世界中の事例を通して綴られていて、金野さんの建築の思想を形づくる原点が伝わってきました。ロτζジアはまさにケアの空間ですね。

**金野** ロτζジアが面白いのは、一日たりとも同じ日がないこと。外の環境は刻一刻と変わるので、そこに身を置くだけでまちのリズムや土地の風土を感じることができま

最近、社会福祉法人さんから、複数ある施設のぜんぶにロτζジアをつけてほしいというご依頼を頂いたり、北海道のお施主さんから、風除室を冬季以外の中間期に面白いことができるような場にできないか、なんて相談をうけたりします。コロナ以降、そうやってまちとの接点をつくろうとされる方が増えている気がします。昔でいう縁側のような場所ですが、そうした根本的に失いたくないものを、多くの人が直感的に気づき始めているのかなと。

**時田** 暮らしにおけるハードの側面が、そこで、家族の一体感すら失われていきました。子供が自分の部屋に閉じこもり、家族で食卓を囲まなくなる。私は、ハードがひとの心に及ぼす影響は、死生観にまで及ぶほど大きいと考えています。たとえば西洋では、神と自分という「対二」の関係で自己が決まるという思想がある。でも、日本人は本来「関係性の中にある自分」を生きるひとたちですね。大切なひとがどう思つかというところまで自分の思考を拡張する。家と外の区切りが柔らかな日本の住まいから思想や振る舞いが育まれたのではな

**金野** たしかにそうですね。西洋の建築は、まず強固な壁で囲い、その壁に穴を穿つことで光をどう取り込むか、という順序で空間がつけられるため、外側と内側がはっきりと分断され、細分化された個室が並ぶ構造になりやすい。それに対して日本の建築は、まず大きな「ひさし」があり、柱によって骨組みがつくられています。かつての大きな民家では、ひたすら畳の部屋が続いていて、襖の開け閉めによって集いの場から寝所へと空間の「関係性」を常に調整していく。そうした環境のなかで、日本人は他者との関わりにおける相対的な自分を置いてきたのだと思います。



春日台センター  
神奈川県愛川町でかつて賑わったスーパー「春日台センター」を、福祉を核とする地域の拠点として再びセンター化した。様々なプログラムをもつ棟の建築。まちの動線を大屋根が統合する。施主:社会福祉法人 愛川舜寿会



地域ケアセンターよしかわ  
吉川団地商店街(埼玉県)の中にある店舗の一室を活用した訪問介護事業所+コミュニティスペース。地域の会合や、編み物教室の会場として使用されるほか、すでに10年以上「みんなの食堂」として食事提供をしている。施主:社会福祉法人 福祉楽団

©morinakayasuki

©komochie

BOOK & MOVIE



「アウトブレイク」

エボラ出血熱をモデルにした架空のウイルス「モーター・ウイルス」の恐怖を描いています。動物からヒトへの感染、飛沫・空気感染への変異、都市封鎖(ロックダウン)といった要素が、現実にあったパンデミックを思い出させます。潜伏期間が長く、無症状者が感染を広げる「見えない恐怖」が特徴だったコロナとは違い、映画のウイルスは致死率が高い存在。パニック映画ですが、次のウイルスに向けた感染予防に対するひとつのヒントになるかもしれません。

監督:ウォルフガング・ペーターゼン 出演:ダスティン・ホフマン、レネ・ルッソ、モーガン・フリーマンほか 制作:1995年、アメリカ



「ネイバーフッドデザイン」

地域に根差して事業を展開するなかで、私たちはこの地域にどんな光景をつくり、どんな暮らしを残していきたいのでしょうか。また、この地域に住まわれている方々は、どのような日常や未来を望んでいるのでしょうか。そんなことを考えさせられる一冊です。地域の声に耳を傾けながら、ともにありたい姿を描き、その実現に向けた一歩を積み重ねていくための実践のヒントが詰まっています。

著者:荒昌史 出版社:英治出版、2022年

「アウトブレイク」推薦者:文 田中慎/勤務年数:8年10ヶ月/現職:介護職(一般職)  
好きなこと:電車での行き先を決めないひとり旅。動物全般。サモエド(犬)を買うために貯金中。  
「ネイバーフッドデザイン」推薦者:文 安倍有輝/勤務年数:8年7ヶ月/現職:スーパーバイザー  
好きなこと:子どもとの時間、メダカ観察

NEWS

小田原市螢田「在宅介護総合センターれんげの里」2階に、2026年4月「通い」「泊まり」「訪問介護」「訪問看護」を24時間365日提供しながら、在宅での療養生活を支える「看護小規模多機能型居宅介護」がオープンします。入り口エリアはシェアキッチン、ミニライブラリー、コワーキングスペースなどのパブリックスペースを設け、地域の皆様の居場所としていつでもご利用いただけるよう運営してまいります。ぜひご活用ください。



ネパールの都市バクタブルの「パティ」と呼ばれる東屋。広場や水場、寺院に隣接するこの東屋は地域のロジジアの空間となり、人々はくつろいだり、読書や手仕事をしたり、人々の日常と地続きの風景になっている。

金野 個室で守られる安心も大切にしながら、同時に、誰かの存在を感じられる「緩やかなつながり」をどうデザインするか、それは今回の改修でも大切にしている点です。たとえば、ダイニングやリビングのような共有スペースのほかに、各居室を出た「通り土間」と呼んでいるスペースに、本棚と組み合わせた小さな居場所をつくっています。今日はみんなが集う場所には行く気分ではないけれど、部屋に閉じこもりたくもない。そんなときに1、2名で腰を掛けられる場所です。看護小規模多機能という場で

金野 ラウンジ正面はガラス越しで外の緑が見えます。さらに、ラウンジのエリアと看多機ゾーンは窓で繋ぐので、ご利用者はラウンジ側の人の出入りが見える。そういうことを通して、内と外が日常の中に溶け

金野 1階から上がつてすぐのところにくるラウンジは、ご利用者やご家族はもちろぬ、地域の方がふらっと立ち寄って不安を相談できる「安心の拠点」にしたいと思っています。イメージとしては、訪問看護師の秋山正子さんが始めた、がん患者さんとご家族を支える「マガーズ東京」、同じく秋山さんが開設され新宿戸山団地で始められた誰もが気軽に集い、健康や医療、介護の相談ができる「暮らしの保健室」のような場所です。

金野千恵 (このん・ちえ)  
建築家/teco代表/京都芸織維大学 特任教授  
1981年神奈川県生まれ。2005年東京工業大学工学部建築学科卒業。2005~06年スイス連邦工科大学奨学生。2011年東京工業大学大学院博士課程修了、博士(工学)。2011年KONNOを設立のち、2015年よりteco代表。2021年より京都芸織維大学にて研究教育に携わり、現在は特任教授。主な作品に、住宅「向陽ロジシアハウス」、地域共生文化拠点「春日台センター」など。https://teco.studio

時田佳代子 (ときた・かよこ)  
潤生園理事長  
神奈川県小田原市生まれ。地元小田原でイタリアンレストランの開業・経営を経て、平成14年、社会福祉法人小田原福祉会に入職。平成30年より社会福祉法人小田原福祉会理事。誰もが安心して暮らし続けられる地域づくりに従事。認知症ケア事業協同組合理事長、内閣府規制改革推進会議専門委員。

時田 極めてフレキシブルだったわけですね。その柔軟性は、単に空間の問題にとどまらず、そこで過ごすひとひととの心の距離の取り方や、精神的な柔軟性にも繋がっているはず。柔軟性のある器」としての建築

時田 今回、金野さんをお願いして「潤生園れんげの里」2階を「看護小規模多機能型居宅介護(看多機)」に改修して頂くこと

になりました。医療的な支えが必要になっても、最期まで住み慣れた地域や家で暮らすことを支えるための拠点になります。現在の福祉の主流はプライバシー重視の「完全個室」ですが、本当にそれがいいのかとずっと考えています。かつての多床室(相部屋)には、自然に生まれる「おたがいさま」の空気、小さなコミュニティがありました。それをプライバシーの名の下になくしてしまっているのか。これは福祉の本質に対する問いかけでもあるのです。

過ごすとき、朝、昼、夜の居場所を機械的に決めてしまうのではなく、広さを生かして「気分によって異なる環境を選べる」ということが重要だと考えました。自分自身が思うように動けなくなっても、光や緑といった外の環境は絶えず変化しませ。外部の人も利用できるしつらえにしておけば、日々そこを訪れる顔ぶれも変わります。そのような変化をどこまで建築が取り入れられるか、それ次第でそこに暮らす人たちの生活のリズムは変わってくると思うのです。

合う風景が出てきたり、いつものメンバーとは違う顔ぶれに、ご利用者が社会を感じられるような場所になっていけばいいなと思っています。

建築家として私が意識しているのは、未完のまま環境やひとに委ねることで生まれる豊かさです。建築がどれだけ多くのものを受け入れられる「器」になれるか。根本的には、そこをずっと考えています。

時田 「れんげの里」が金野さんの手によって柔軟性のある器に生まれ変わることで、ご利用者やここで働くスタッフ、さらには地域の方とのつながりを結び直すことができたら、素晴らしいと思っています。そうした新しい景色が広がることを、心から期待しています。

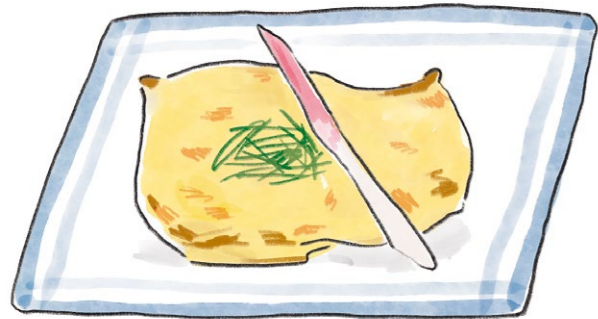
潤生園の台所

魚の黄身焼き

【材料】1人分

- 鱈 1切
- 酒 3g
- 水 10g
- 塩 0.2g
- 油 7.5g
- 黄身 3.77g
- 人参 5g
- シイタケ 5g
- しそ 0.1g
- はじかみ 1本

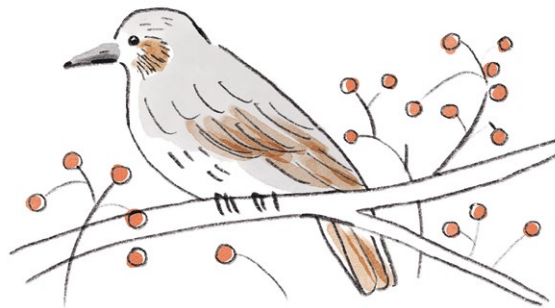
- 1 魚は塩水につけておく。
- 2 卵の黄身をよく混ぜたところに油を少しずつ加えて混ぜていく(一度にたくさんの油を入れると分離する)(よく混ぜないと分離する)。
- 3 もったりとしたものが出来たら人参・しいたけを湯がいて水気をよく切り、みじん切りにしたものを加える。
- 4 コンビ(またはオープン)200℃で5分、その後ひっくり返して③をかけて3分焼く。中心温度85℃まで上がったたら完成。



卵黄の鮮やかな黄色が菜の花のようで、食卓を春色に飾ってくれる一品です。



浅香未来  
職種:栄養士  
勤続年数:2年10ヶ月  
自己紹介:栄養士として調理で多く働いています。休日にはお菓子などをよく作っていて、最近、パンを作ることにまっています。



#### 編集後記

ふりそく日差し、海、山、街に息づく暮らしと生命の力、地域を支える潤生園の温かな営みを、表紙の彩りに込めました。  
今号より特集記事が増え年刊に。末長くご愛読いただければ幸いです。

#### 潤生園ニュースレター「うるる」vol.11

発行日 令和8年4月  
デザイン TAICHI ABE DESIGN INC.  
撮影 橋本貴雄(P3～6) 牛山恵子(P11～12)  
イラスト 落合恵  
編集・執筆 牛山恵子(合同会社スタジオパンダ)  
大谷薫子  
発行者 社会福祉法人 小田原福祉会  
うるる編集部  
神奈川県小田原市穴部377  
<https://junseien.jp>